

平成29年度緑のボランティア活動に関する
指導者育成委員会（第1回）
議事録

東京都環境局自然環境部緑環境課

○内藤緑環境課長 定刻になりましたので、ただいまから「平成29年度第1回緑のボランティア活動に関する指導者育成委員会」を開催したいと思います。

改めまして、私、環境局自然環境部緑環境課長の内藤と申します。よろしくお願いいたします。

今年度も前回に引き続きまして、5名の皆様に委員をお願いすることになっております。今年度もぜひ闊達な御意見をいただければと思っております。よろしくお願いいたします。

まず、今回、委員の再任という形で手続をさせていただきましたので、改めまして、座長の選任に移らせていただきたいと思います。

座長をお引き受けいただける方はいらっしゃいますでしょうか。

事務局からの提案でございますが、前期から引き続いて小河原先生に座長をお願いしたいと思っておりますが、皆さん、いかがでございましょうか。

(「異議なし」と声あり)

○内藤緑環境課長 それでは、座長は小河原委員によりしくお願いしたいと思います。

早速ですが、本日の議事を幾つか用意しておりますので、議事進行についてよろしくお願いいたします。

○小河原座長 皆さん、おはようございます。お久しぶりです。少し間があいたようですが、また新たにスタートをするということで、頑張っていきたいと思っています。

きょうは、議事としては、報告が1つ、議題が3つございます。まずは、報告の「平成29年度緑のボランティア指導者育成講座について」ということで、事業がいろいろ変遷しているわけですね。その状況ですとか、交渉の相手あるいは要綱・要領の改定について事務局のほうからお願いしたいと思います。

○事務局 私のほうから要綱・要領の改正等について御報告をさせていただきます。

今回、29年度要綱の改正に伴いまして、資料1「事業の移り変わり」ということで、こちらの表は改正の要点をまとめたものでございます。

今回、平成29年度の改正になりますが、背景といたしましては、新たなボランティア人材の確保が一定の成果を上げる中、指導者層を育成し、ボランティアの質を高めることが必要という背景のもとに、今回主な改正点といたしましては、講習内容の見直し、フォローアップ講座の導入ということで改正を行ったところでございます。後ほどこの内容につきましては、議題の中で御説明をさせていただきます。

「2 平成29年度講習体系」でございますが、まず、基礎講習。これは、講座受講後、修

了試験合格者に対しまして東京都2級緑のボランティア指導者の資格認定という形になります。それから、専門講習のほうでございますが、自然観察・体験活動コース、緑地保全活動コースということでございまして、こちらの講座受講後、修了試験、実績等々を踏まえまして、東京都1級緑のボランティア指導者の資格認定という形で29年度の講習体系という形になっております。

1枚めくっていただきまして、資料2になります。要綱・要領の改正につきまして御報告を申し上げます。

1番目「緑のボランティア指導者育成講座に関する講習等実施要綱」。これは、平成29年度3月に改正いたしました。

まず、(1) サポートレンジャーに関する講習について。これは、第1章第1ほかに規定をされているところでございます。今回の事業改正に伴いまして、サポートレンジャーコースに関する記述を削除いたしました。それに伴いまして、講座名が「緑のボランティア指導者等育成講座」から「等」を抜かしまして、「緑のボランティア指導者育成講座」に変更することといたしました。

次に、(2) 受講料の規程について。これは第2章第9に規定をしております。これは、講習の未修了者が3年以内に再受講の際に一部科目を受講する場合のため、時間当たりの受講料規定について定めておりましたが、平成26年度以降は講座開催が3年ごとになるということに伴いまして、時間当たりの受講料の単価規定を削除いたしました。別途、募集要項等で定めることということで改正をいたしております。

次に、(3) 認定指導者の公表についてでございます。これは第4章第21に規定されております。ホームページ等で指導者の存在を周知し、区市町村等での活用を促進するため、公表についての規定が定められておりましたが、これは個人情報保護の観点から非公表という形にさせていただきまして、本規定を削除いたしました。平成27年度から既にホームページ等での公表を自粛しているところでございます。

次に、2番、要領の改正についてでございます。「緑のボランティア活動に関する指導者育成委員会運営要領」。これは、同じく平成29年3月に改正をいたしております。

(1) 委員会の名称についてでございます。これも要綱と同様に「緑のボランティア活動に関する指導者等育成委員会」から「等」を抜かしまして「緑のボランティア活動に関する指導者育成委員会」という形に変更しております。

(2) 会議の開催について。これにつきましては、出席の先生方の御意見をいただくとい

う形と意見交換の開かれた場ということで、基本的にそういった性格に鑑みまして、定足数を定めないという形にいたしました。

(3) 会議の開催についてでございますが、附属機関等情報公開に関する取り組み（見直し）結果にあわせて、当該委員会が公開されることとなったことに伴いまして、会議、議事録及び会議資料の公開について規定をいたしました。

要綱・要領の改正についての御報告は以上でございます。

○小河原座長 ありがとうございます。

まずは大卒の話でしょうか。先生方から御質問等はございますでしょうか。

それぞれの基礎講習の中身等に関してはこの後またですね。

○杉本課長代理 そうですね。議題の中で御説明いたします。

○小河原座長 次の議題の中に入っていますけれども、今回は、資料1、全体の体系が変化をしてきている。一度サポートレンジャーコースが入り、そしてそれがまた見直されるとか、参加者数が減ってきたことに対してそれをどう底上げするかという形で改正がなされてきているのかなということですね。

よろしいですか。

(「なし」と声あり)

○小河原座長 特にいいですか。ここはまだ大卒の話ですのでね。

それでは、次の議題です。中身の話ということで、基礎講習について、これは資料3から6までということで中身が書いてございます。それでは、事務局のほうからよろしく願いいたします。

○事務局 緑環境課保全担当の岡と申します。私のほうから御説明させていただきます。

まず、資料3をごらんください。こちらは、平成26年度の基礎講習の内容になっております。この土台をもとに29年度もアンケート結果や指導者育成委員会での御指摘を反映しまして、内容等の見直しを行いましたので、参考用にごらんください。

続きまして、資料4をごらんください。基礎講習の平成29年度からの見直しについてということで、大きく実習の充実を図っております。平成24年度から26年度までの基礎講習、専門講習修了者に対して行ったアンケートの中でも、約4割が実習時間の増加を希望すると回答しておりました。また、27年度の育成委員会におきましても、より実践的な講習をふやす必要があるとの御指摘をいただきました。

そこで、改正点としまして、「指導法の基本」という講座を座学から実習へと変更するこ

とを予定しております。これは、都庁内で行っていたものを小峰公園で実習という形に変えることを予定しています。それによりまして、指導者として必要な知識・技術と効果的な指導法を、より実践的に学ぶ機会を提供したいと思っております。

下の表は、平成26年度と比較して、平成29年度の改正点を表であらわしたのになります。

では、次に、資料5に移りたいと思っております。資料5は、29年度の基礎講習の申し込み状況になります。初めに、指導者育成を再開する前段として注力しておりましたボランティア人材育成事業の現状についての御報告から始めさせていただきたいと思っております。

平成27年度に森林や緑地の保全活動情報を発信しますサイトとして「里山へGO！」というものを開設し、同じ年に保全地域での保全活動を気軽に体験していただける保全地域体験プログラムというものを開始しました。お手元に「里山へGO！」を紹介する冊子と、保全地域の紹介リーフレットを御用意させていただきました。この紹介リーフレットは、これ以外の地域の方も順次作成予定なのですけれども、体験プログラム参加者やボランティアの初心者の方にも保全地域の趣旨を理解した上で御参加、活動いただけるようにお配りしています。

「里山へGO！」の実績としまして、登録者数は28年度末で500名を超えました。また、「里山へGO！」から直接参加申し込みができます保全地域体験プログラムも延べ690名に参加いただいております。真ん中のグラフは、以前、環境局で行っていた緑のボランティア登録の登録者数と「里山へGO！」の登録者数をあらわしています。御覧いただきますとおり、緑のボランティア登録はかなり先細りの状態となっていたのですけれども、「里山へGO！」開始以降、また登録者数が急増しております。こうした新たに掘り起こしたボランティア人材を指導者に育成して、保全活動の質を高めることを目指したいと思っております。こうした方々に興味を持っていただくために、主な広報手段としまして、保全地域の活動団体に周知を依頼いたしましたほか、「里山へGO！」を活用して、ホームページへの掲載やメールマガジンの配信などを行いました。また、各自治体の広報紙や読売新聞のイベント情報欄にも情報を掲載させていただきました。

さて、次に、29年度の申し込み状況ですが、4月末に申し込みを締め切りまして、27名からの申し込みがございました。今までは委員会の中で受講者の決定を行っていたのですけれども、今年度から会議が公開されることに伴いまして、個人情報保護の観点から、匿名での状況報告という形に変更させていただきたいと思っております。27名という申込者数は、26年度の指導者基礎コースの申し込みが6名、サポートレンジャー基礎コースの申し込みが19名であったことを鑑みますと、指導者基礎コースとしてはかなり大きく伸びています。申込者の平均

年齢はやはり60代が多く、男女比率としても男性の方が多いという傾向はおおむね従来どおりでございます。ただし、今年度は区部からの参加者が大きく増加いたしまして、26年度は8割が多摩部からの参加者であったことからみますと、今は区部からの申し込みが5割を超えておりまして、区部の登録者数が多い、「里山へGO！」を活用したことの効果かなと思われまます。

続きまして、資料5の別紙ですけれども、こちらは申込者一覧の詳細でございます。網かけされている部分が保全地域のボランティアであったり、体験プログラムの経験者の方をあらわしています。こういった方が6名いらっしゃいました。都内で自然観察や緑地保全などのボランティア活動経験が年10日以上あり、1年以上の実績がある方という受講資格につきましては、事務局で確認しましたところ、全ての申込者が要件を満たしてございました。申込者全体の活動実績の傾向としましては、下のグラフのとおりになりまして、身近な緑地や公園、保全地域で緑地保全活動や自然観察を行っている方が多くなっています。

基礎講習の資料としましては、最後に資料6として、平成29年度基礎講習のスケジュールの概要をまとめたものがございます。

基礎講習についての御説明は以上になります。

○小河原座長 ありがとうございます。

中身が相当あるのですけれども、時間はまだございますので、ゆっくり先生方から御質問、御意見等をいただければと思いますが、平成26年度募集から、私が担当している「指導法の基本」を、以前から実習を含めてやりたいというお話だったのですが、実習主体に組みかえていこうという形で、時間の組みかえが起こっているということ。また、ボランティア人材として「里山へGO！」というアクションが始まって、そのサイトがつくられ、参加者数が伸びているというお話がございました。

いかがでしょうか。

これまでの緑のボランティアに登録されている皆さんがどれぐらい活動されているかというのとはなかなかわからないですか。

○内藤緑環境課長 もともと緑を保全するに当たって、行政だけでやるというのがなかなか難しい中で、ボランティアの方を、過去もいろいろな事業を踏まえてやってきたのですが、なかなか追いかけれないというのが実情でした。どこまで追いかけても、定期的にアンケート調査とかをしていたのですが、追いかけれない中で、先細りしてきたと。役所ですので、当然、指導者講習をしながら未経験者の方をふやすことが予算上、増額させていただきます

ということがなかなかできないというのがありまして、我々も保全地域で活動団体さんと一緒に保全を進めさせていただく中で、いろいろなところからメンバーがもう高齢であるその萌芽更新できないのだよみたいな話もあったので、これまで参加したことのない方をいかに裾野を広げるかというところを、ここ数年は注力してきたところでございます。

「里山へGO！」というのも、実は、東京都環境公社に全部委託して、我々のスタッフだけだとなかなか難しい部分がありますので、それでかなり集まっていたのかなと思います。先ほどの指導者講習の中でも、効果的な広報というプログラムがあるのですが、まず東京都がやれよみたいなところもありましたので、そこは、我々もお金がない中で工夫しながら、ここまで少し増やしてこられたのかなと思っています。

ただ、楽しんで、良かった、今日はいい汗をかいたなというのも一つの成果ではあると思うのですが、どう継続して活動に参加していただくのかというのが大きな課題になっております。なので、今回、「里山へGO！」に登録していただいた方、もしくは実際に保全地域で活動していただいた方に指導者講習の御案内をしつこくさせていただいて、少しでも継続的な参加、ひいてはその後の活動全体の質が向上する取り組みにつながればと考えております。

○小河原座長 登録者数が500名を超えているということですが、ホームページを閲覧するだけの方のカウントはしていらっしゃるのですか。

○内藤緑環境課長 アクセス数の分析もしています。今、手元にはないのですが、最初、立ち上げのときに我々も広報をしたのと、マスコミに売り込みをして記事にしてもらったというのがあります。あとは、このごろ多いのは口コミですね。我々もSNSをやってはいるのです。何と云っても、行ってよかったよみたいな口コミの効果はやはり大きいと思います。年間24回ぐらい保全地域で体験プログラムをやっているのですが、少しでも口コミで広がっていただくというのですか、内容を少し充実させるように現場とも調整をしているところでございます。

○園田委員 「里山へGO！」がすごく人気というか、参加者が多いという、これはなかなか嬉しいなと思っているのですが、私も何回か手伝いに引っ張り出されちゃって。

○内藤緑環境課長 ありがとうございます。

○園田委員 その感覚で言うと、外目で見たら、「里山へGO！」は結構負担が大きいのではないかと考えているのです。だからお願いは、環境公社の若い人たちをもっと鍛えろと。つまり、研修とか。せつかくたくさんの方が来ているわけだから、いわば人材発掘ではないで

すけれども、そういうことにつながるような形の中でやるためには、環境公社の彼らがいろいろなことを学んでいくということ。ここにある緑のボランティア指導者の育成と、その上で彼らをもっと講習して鍛えていく何かがないとちょっとつらいかな。要するに人気はあるのだけれども、正直、彼らに聞くと、毎日それで追いかけて回されているみたいなことになるので、何とか人員を増やしてよと。彼らをもう少しゆったりした形にしないと「里山へGO！」自体の参加者に対する丁寧なフォローができないのではないかなということが見たところによる感想です。だから、その辺は一言言っておこうかというぐらいです。

○岩間委員 緑のボランティアを受講された方、修了された方を追いかけていくというのはよくわかります。今、委員の方がおっしゃったように、スタッフのフォローをしてくれる方に回したらどうですか。それも、ただやってよではなくて、せっかく研修を受けて、スキルが上がったところを生かしませんか、そうするとまた新しい仲間があなたのおかげで増えますということで、職員の方、スタッフの方の補佐という形でお願いしていったらどうでしょう。そうしたらもっと、緑のボランティアに関わった方にもその噂が広がるし、年齢が行っても、例えばちょっと足腰が痛くてもできるものがまだ里山には残っているぞということにもなる。スタッフの方は慣れるまでは大変かもしれませんが、いいメンバーを発掘していく、自分のスキルも上げるきっかけになるのではないのでしょうか。

○小河原座長 そうですね。私もちょっと、そういうことを考えていたのですけれどもね。その辺はいかがでしょうかね。

○桜井委員 難しい時代だと思うのですよね。これを始めたころ、もう何年たつたの。

○小河原座長 14年目ぐらいです。

○桜井委員 15年近いわけでしょう。15年というと、国際自然大学校は35年ぐらいなのですが、けれども、ちょうど転換期だったのです。私は子供が相手の商売ですから子供のことを見ているのですが、一番わかりやすい話をすると、1983年はウォシュレットが出たときなのです。要はトイレが水洗。もう一つは、1999年ぐらいに電磁調理器が出たのです。最初、電磁調理器は50万円ぐらいしたのです。今だと2、3万円でしょう。そういう時代の変遷があるわけです。自然体験の世界でも、今の一番は、いかに入り口を広げるかということよりも、入り口を広げないと危なくて入ってこられない。一幼稚園が35人ぐらい子供を連れてきて山の中でたき火をすると、2人ぐらいは火に手を突っ込もうとしますよ。

○小河原座長 やらないからね。

○桜井委員 そうなのです。ないのだから。唯一、今まであったのはお父さんがたばこを吸

ライター。お父さんは家の中でたばこを吸えなくなってしまったから。仏壇にお灯明を上げる家にはまだ火があるのです。だけれども、ほとんど核家族化で、小さい子供はお灯明を上げない。火がない。そうすると、火を知らないから手を突っ込もうとするわけです。

そういう時代になってきていて、「里山へGO！」も、そういうことに対する危機感を持っている親はこういうものにすごく反応する。それで、家族で来るのだと思うのです。そういう点ではすごくいい切り口だと思うのです。逆に、そういう家族、子供を相手にしなければいけない仕事というのは、非常にプロフェッショナルな能力を要求されるのです。子供の発育、発達のこともわかっているとか、社会状況をわかっている、安全管理のこともわかっているという非常にプロフェッショナルな能力が要求される。何でもそうですよね。初心者を相手にするときには非常に能力の高い指導者が必要になる。

十何年前は、多分、参加者もそこそこワイルドで、指導者もアバウトでいけたのですよね。だからボランティアでやっていけたというところがあるのですけれども、こここのころに来て、子供の体験教室などをやっていても、大学生のボランティアでは対応し切れない時代に入りつつあります。だから、ほぼ職員の、全部を鍛え上げた人間だけがプロフェッショナルとして対応していかなければいけない時代に来ている。逆に言うと、それに対する対価を払おうとする親が多いです。最近では5万円の参加費は平気ですよ。逆に言うと、その世代の親しか子供に自然体験をさせられないというのが現状なのです。

ではどうしたらいいかというと、今、園田先生のお話を聞いていてまさにそうだと思うのです。専門にやっている人たちにきちんと注力して、プロフェッショナルにしてあげて、こういうボランティアの指導者というのはそういうものの手足になるような、時代が変わってきたので、チャネルの違う育て方をしないといけないのかもしれない。同じ指導者みたいな並べ方というのは少し難しい時代に入っているわけです。だから、私は、今、完全にプロフェッショナルだけを育てるセクションで仕事をしています。ものすごく厳しいですよ。

そういうプロフェッショナルの皆さんたちと、だからといって、プロフェッショナルだけではなくて、そのアシスタントをするボランティアの人たちも必要なのです。そういう人たちをどう育てていくか。今までのように、任せられる人にするのではなくて、プロのアシスタントとしてやっていくという視点を考えていかないといけないのかなと。抽象的な理論で、具体的な話にならなくて申しわけありません。

○小河原座長　ということは、そういうプロフェッショナルな人たちの組織があり、そこと一般の、軽い体験をしたり、「里山へGO！」の体験をしたい人たちをつなぐ指導者としての

ボランティアということですかね。

○桜井委員 さっきおっしゃったSNSとか口コミ力は強いですよ。だから、もしかすると、指導者という名前はついているのだけれども、参加者に近い、広報戦略部隊のような。これは楽しいということを知っている人がいることが大事なわけですよ。楽しいですよと言ってくれる。マッキントッシュのエバンジェリストがいるではないですか。ユーザーはマックっていいんだよと宣伝してくれる、そういう人なのですよ。そういう人を育てて、この体験は本当に楽しいという人を育ててあげて、そういう人たちがグループのリーダーみたいな、一緒にやりましょうと言ってくれるぐらいの育て方なのかなというのは感じています。

○岩間委員 もともとところで、私は短い関わりなのですけれども、環境教育の部分が薄かったと思うのです。森林の保全ができる人を育成しようとか、ボランティアさんを育成しようという委員会です。だから、裾野を広く、楽しく、笑いながら自然に触れて守っていけるようなことを広げていただくということです。今、それを本当に指導できる人を育てなければいけないとなると、先生がおっしゃったみたいに、もう一つ違うランクではないけれども、違う道というか。人なのかもしれません。ただ、この委員会でどこまでそれをやるかということだと思います。これはちょっと分けて考えないと負担になってしまうかなという気がしています。

私は、環境教育をやらせていただいて、幼稚園から大人まで、大学とか、現場に行くのですけれども、50代の教師でもミミズをさわれない。20代、30代ではないのですよ。ミミズにきゃーっといって逃げていってしまいがちながら理科を教えている。そういう世界なのです。だから、やるときにはなるべく学校の校庭をいっぱい使って、公園を使って、公園に植樹をしてというところからいって、こちらを進めているという感じなのですけれども、そういうものを分けて考えないといけない。余りこっちは難しくしてしまうと、もう来られなくなるなという気がいたします。

○桜井委員 だから、ファンクラブなのです。この活動が楽しいという人たちを増やしてやる。それを宣伝してくれるというか、周りに言ってくれて、一緒に行きましょうよと誘ってくれるような人たちというセクションがあって、現場に行ったらきちんと指導してくれる。

最近こういうものをプロでやるのが組織化できるかというのは結構難しいと思っています。というのは、組織になっていても、指導者はみんな独立採算状態なのです。要は、人気商売だから、徒弟制度まではいかないけれども、ついていくみたいな。それで伝播してくというものがある。

この年になって、実は、きのうおととい、私の恩師の先生ががんになったものだから見舞いに行ったのですけれども、おまえに俺の仕事を譲ってやると言われて、いやいや、この年でまた仕事をもらうのかと思って、そういう世界があるわけですね。

でも、それはいい面と悪い面とあると思うのです。国際自然大学校もそういうものがよくないから会社組織にしたのですけれども、でも、その組織の中でも、やはり徒弟制度みたいなところがあるから、こういう人を目指しましょうみたいなモデルをつくってやるのが大切なのだろうなと思いますね。

○小河原座長 プロフェッショナルの世界ではそれはあり得ますけれどもね。これはあくまでももっと間口を広げて、先ほどからお話がありますけれども、もっと緩やかな講習でいいのではないか。例えば今、基礎講習は何時間でしたか。

○事務局 36時間です。

○小河原座長 36時間ですよ。結構な時間を拘束されてということが一方でありながら、もう一つ、今のお話を聞きながら思ったのですけれども、これは根幹にかかわるのですが、指導者という言葉がいいのだろうか。

○桜井委員 そういうことなのですよ。

○小河原座長 もしかして、このボランティアにとっては指導者と言われるとやはり敷居が高い。

○岩間委員 勘違いしてしまう。

○小河原座長 そうです。そこまではできないのだけれどもお手伝いはしたいとか。もうちょっと間口を広げるのなら指導者という言葉を使わないでできないのか。これは先の話ですけどもね。

○桜井委員 まさにそういう時代だと思います。その辺も捉えていかないといけない。

○園田委員 今まで受けた人たちも、指導者と言われるのは恥ずかしいと本人たちが言っているのだから。

○岩間委員 名刺に名前を刷ってもらったことがありますけれども、これを受けた指導者なのだという勘違いも出てきてしまう。

○桜井委員 ここだけの話で、資格おたくみたいな人はぼちぼち結構ですと言っていないと。

○岩間委員 いますよ。裏にいっぱいこういうものを書いている人。最初は必要だったのかも知れませんがね。

○小河原座長 金子先生、学生さんが例えばこういう講習を受けるということはいかがでしょう。

○金子委員 今のミミズではないけれども、本当にさわったことがない子が増えてきています。私たちは造園という現場に行くのですけれども、入ってくる子はさわったことがない子がふえてきています。

○小河原座長 農学部なのに。

○金子委員 そうです。まさに農学部なのにですよ。なので、聞いているとやはり両方でしょうね。本当に基礎的なそういったところを知っていなければいけない、マナーも含めて最低限のことを理解してもらおう。そういう人たちと、来る人たちを受け入れるためにはかなりきちんとした指導者を養成しなければいけない。指導者というか、受け入れる人たちを養成しなければいけないという部分があるのかなど。学生は正直、両方いるのです。そういったことを知っていなければいけない部分もあるし、学生ではこういった関連に行く、仕事としてやる人もいますので、それを受け入れるということ。これは、授業で何をしようかと思いつながら話を聞いていたのです。ちょっと変えていかなければいけないなというのを感じながら聞いていたのですけれども、両方をしなければいけないでしょうね。「里山へGO！」でいろいろな人が行きますので、来る人たちには最低限のこれだけは知っていてよという部分。自然も含めて、そういうことができるといいですかね。

○桜井委員 テレビのコマーシャルで住宅展示場のベランダでキャンプができますと。あれ、実は僕が仕掛けたのですけれども、あそこまで持っていかなければいけないのです。住宅展示場でキャンプをやるとほえまくって、あそこまで持っていっていただけなのですけれども、あれはキャンプじゃないと。業界からはもう、総スキャンです。あんなことをやりやがってと。だけれども、あれは今、すごいですよ。わんさか人が来るのですよ。

結局、間口を広げるというのはどういうことなのかということと考えたら、さっきも言ったように、火を見たことがない子、私たちの観念はそれがないのですよ。さっきおっしゃったようにミミズをさわれない。ミミズをさわれない人に、嫌いになる前に無理やりさわれと行って、とりあえず楽しいよという妄想を持たせておいて、楽しいと行ってやるという、そういうステップを、もうワンステップ、前のステップを踏ませてあげなければいけないということを考えると、この人たちはそのステップを踏んで、とりあえずミミズがさわれるぐらいまで、楽しいと思えるところまででいいのではないかな。

だから、私は、講習内容を変えろというよりは、講師の先生にそういう視点で講座をして

もらうといいのだと思うのです。とにかく楽しいことなのです。だから、うちの佐藤繁一が一番危ないのですけれどもね。安全の話と一番。

○小河原座長 深い話というか、難しい話になる。

○桜井委員 立場上、行くのが怖いという話をしなければいけないからね。そこで楽しい話をしろということは言うておきますけれどもね。余り楽しい話になったら、安全ではなくて危険な話になってしまうから。でも、そういう視点で話をしてもらえれば、こういう講習で、ああ、そうか、もっと行ってみようと思ってもらえればいいと思うのです。

○内藤緑環境課長 今、お話をいただいて、最初に公社の話があったのですけれども、なぜ公社に委託したのかというのは、まさに園田さんが言ったとおりなのです。我々は異動してしまうので、もっと腰を据えて、こういう活動をしっかり指導して、企画できる人間ということになると、公社にお願いしていますが、そのときに公社は自然関係を何もやっていなかったというのがあるのです。なので、今、園田委員から言われたとおり、公社の自力を上げるというのはすごく課題だと思っています。都の事業で彼らを育成するというのもなかなか。こっちが発注者なので、ちょっと難しい部分もなくはないのです。ただ、我々も今、現場と一緒にやっている中で、そこはすごく課題だと思っています。今回、指導者育成委員会というのは我々都の直営ではあるのですけれども、彼らのスキルも一緒に上げていくという視点もとても重要なのかなと思っています。

あと、教え方とか、先ほど桜井委員からもありましたけれども、人材をどう育成するかというときに悩むのです。どういうレベルか。まず楽しいよと。さっきミミズの話が出ましたけれども、これはざらなのです。虫をさわったことがないという大人も結構いるぐらいなので。ただ、そういう方から、我々も最終的には東京の自然をしっかりと次の世代に伝えていきたいという大きなミッションがある中でどういう人材を、ピラミッドで言うと、私はよくスタッフにピラミッドで考えようと言うのです。まずは裾野だと。次に、恐らくもうちょっと楽しさを教えてくれる層みたいなものがあって、さらに上になると、ピラミッドの頂上になると、組織にして、みんなで立ち上げて、一緒に活動しないかみたいな、そういう、レベルに応じた人材育成というものが非常に必要になってくるのかなと。その中で、こういった今回の、指導者という言葉がいいのかというのはまさにおっしゃるとおりで、中間層は指導者というか何というか、一緒に学ぶ。

○桜井委員 難しいところは、自然の中でそういう人たちを連れて歩くと、指導者というのはちょっと何か教育みたいな話になってしまう。

ちょっと余計な話ですけれども、机上配付したアウトドアリーダーズアワードが2月にできまして、表彰式をしたのです。おかげさまですごい反響でした。お金も集まったのです。スポンサーを集めまして、大賞は賞金30万円かつメーカーさんからの副賞が80万円分。ザックだ時計だテントだでトータルで100万円ぐらい。ある企業は副賞で30万円の商品券を出しています。もっとすごいのは、1等賞の子を私は知らなかったのです。偉そうなことを言うと、大概この世界にいるやつは知っているよと思っていたのですが、まだ知らない人がいる。

なぜこの話をするかという、指導者は資格を取っていかねばいけないではないですか。そうすると、ピラミッドの頂点はどういう人なのという、既に資格を持っている人になってしまうのです。そうすると、資格を取っていくと、要はたくさん資格を取ろうとすると、ある程度年齢を経なければいけないのです。いい指導者とか、憧れとすると、本当に年をとった人がいい指導者だとは言えないのです。これはそういう点で、こういう人になりませんかという頂上を見せてやる。これはどういう発想かという、スポーツ選手は全部それができるわけです。極端な話、金メダルをとった人が頂上なわけですね。その裾野はみんな、何々さんみたいになりたいと言うわけです。それで裾野が広がって頂上を目指せるわけです。目指すところがはっきりしているから、そのために何をしていったらいいか考える。これとこれとこれとこれだけやったら頂上になれるよというモチベーションが上がらないのですよね。ここが見えていないから。

だから、頂上はやはり広告塔を誰かつくったほうがいい。もしあれだったら、こういうものにぜひ応募してもらって、とってもらおう。速水林業の速水さんがこれのスペシャルアドバイザーになったのです。そういう人が入ってきたりしていますから、決してキャンプとかだけではなくて、環境だとか、農林漁業の人たちにも入ってもらおうと思っています。そういうものを見せるという仕組みをつくるのも大事なのではないかと思います。

○小河原座長 それは多分この先の専門講習のところにつながっていくことですから、そういう意味では全体がつながっていますので、議題の2番目、専門講習についても続けて御説明いただいて、全体像をどうしていくかとか、そういう部分に関係しながら御意見をいただければと思います。よろしく願いいたします。

○事務局 では、引き続き、専門講習の御説明に入ります。資料7をごらんください。

こちらは、平成26年度の専門講習の内容になります。資料7①が自然観察・体験活動コース、緑地保全活動コース双方に共通する科目37時間。資料7②が各コース独自の科目、各23時間についての内容を記載しています。専門講習も基礎講習同様、こちらの内容をベースに

アンケート結果や指導者育成委員会での指摘を反映して見直しを行いました。

資料8をごらんください。平成29年度は、専門講習からの見直しにつきましては3点を予定しています。1点目は、基礎講習同様、実習の充実です。平成27年度の指導者育成委員会におきまして、みずから学ぶだけでなく、教えることを実践する機会の不足について御指摘がありました。そこで、見直し案として、よりコミュニケーション能力と指導者としての実践が重視されますコミュニケーション技術・参加者への伝え方と、企業や学校との体験活動の2科目を座学中心から実習中心へと変更したいと考えています。26年度の実績と今年度の見直しの方向性は表のとおりで、場所も都庁やNSビルで行っていたものを、自然公園や保全地域等での活動にしたいと考えています。

2点目としまして、2つの科目で講習内容の見直しを行う予定です。平成26年度の専門講習修了生のアンケートでは、効果的な広報と事業管理の2科目について内容の改善が必要との意見がありました。また、27年度の指導者育成委員会では、講座内容について、ボランティア活動を行う上で、活動地域の将来的な目標や理想像、ミッションを描くことの重要性について指摘がございました。このことから、より実践的な広報手法や組織運営、計画を立てる手法を習得できるように内容の見直しを予定しています。特に事業管理につきましては、地域の目指す姿や計画の立て方を目指すような講座にしたいと考えておりますので、こちらもいろいろと御意見をいただければと思います。

最後に、3点目としまして、自主研究・調査の導入を予定しています。平成24～26年度の専門講習修了生のアンケートでは、約2割から講習時間がちょっと長いとの回答がありました。また、参加を検討する段階で講習時間の長さや費用の高さが参加を思いとどまらせてしまう障壁になっているという可能性がございました。参考資料として、自然観察、緑地保全関連の各種講座の比較という表をごらんいただきましても、緑のボランティア指導者育成講習の専門講習は、講習の時間が長くて、時間当たりにすると割安なのですけれども、総費用で言うと高めであるということがわかります。

見直し案としまして、一部科目についてテーマに沿った事前学習課題や事後課題を導入しまして、それを講習時間の一部とみなすことで、プログラムの質を維持しながら、参加者の時間面、費用面での負担軽減を検討しています。

事後課題の例として幾つか挙げさせていただきましたけれども、こちらについても御意見をいただければと思います。課題は、講座内で振り返りやフィードバックの機会を設けることを予定しておりますほか、自主研究・調査時間分の聴講料は削減することを検討していま

す。これにより、講座で学んだことを各自のフィールドで実践する機会を創出するとともに、プログラムの質を維持しながら、参加者の時間面、費用面での負担を軽減したいと考えています。

次の資料9は見直しの概要を表であらわしたものになっております。

専門講習についての御説明は以上です。

○小河原座長 ありがとうございます。

ということで、1つステップの上がる専門講習ということですが、26年度までの講習に比べて、実習を中心に据えようということで、コミュニケーション実習と企業や学校との体験活動、これを実習型に変更する。地域の目標、創造、そういうミッションというものをしっかり見据えた広報であり、事業管理、そういう中身の内容を明確にしていこうということ。それから、60時間はすごい時間ですよ。それは先ほど来のお話と、専門講習の人はプロフェッショナルなのかということ、そうでもないですね。それでもそこまでいかないわけですね。そうすると、そういう皆さんにどのレベルのものを、これからの時代として求めていくのか。そのためのやり方をどうすればいいのかということで、まず、当面の見直し案としてそれぞれの自主研究。みずからのフィールドで自主研究をしていただき、それをどういう方法でフィードバックするかが難しいところですが、それで時間と費用を軽減していこうというお話かと思えますけれども、先生方、御意見いかがでしょうか。

○園田委員 私がやっていて、今までのおじいさん、おばあさんたちのどこがだめかということ、自分が教えられたことをそのまま、対象が変わろうが同じように教えるわけですね。中学生だろうが、高校生だろうが、社会人だろうが、みんな同じようにやるわけです。私は一回、頭にきてどなったこともあるのです。例えばヒノキの間伐をやるときに、受け口がどうだ、追い口がどうだということを細かく高校生に教えるわけです。林業修行としてやるのだったらそれは必要だ。でも、この人たちにとって大事なことは何かといたら、間伐という効果は何なのかということをもっと教えなければだめじゃないかというその一致ができていないのです。だから、自分が受けた講習というか、いろいろなところで教わったことをそのままの形で、対象が何を求めているか、あるいは何を伝えていかなければならないかを考えないままに教えてしまうことが、最大のだめなところだよということなのです。

特に専門講習の課題というか、対象の目的、要するに何のためにこういう人たちをサポートしていかなければならないのかみたいところを、目的によってきちんと理解することが大事。つまり、対象とフィールドによって変えられるということが大事ではないかと思った

のです。だから、先ほどもお話がありましたけれども、専門講習を受講した人は、環境公社のスタッフの手下になるぐらいの、現場を踏ませていく過程が必要ではなかろうか。だから、ただ講習を受けて、はい、おしまいですではなくて、ずっと1年間ぐらい実習させていくということがあると役立つなと思っております。

○桜井委員 とてもいいなと思ったのは、自主研修とか調査をさせましょうというのだけれども、やりなさいと言っただけだと絶対にやれないと思うのです。講習内でそういう相談を受ける。要は講習には来るのだけれども、何人か先生がいて、個別に相談を受けてあげる。講習が2時間あったら、2時間の間で相談に来て、終わったら帰ってもいいよみたいな、そういう講習の時間もつくってあげないと、そこで具体的に何回かあって、進捗状況を見て、テーマを確認してとか、大学で言うゼミみたいな状態にする。そういう具体的な指導の時間を講座の中に盛り込んであげないと、最初に動き出すエンジンとしてはやっておいてあげたほうがいい。そういう時間も盛り込んだほうがいいのではないかなと思います。

○内藤緑環境課長 おっしゃるとおり、こういう自主研究とか自主調査みたいな形だと、講義を聞いて、はい、行ってと言われても、えっとなってしまうので、やはりガイダンスがすごく重要なかなと思っています。助走期間がないとなかなか。なるほど、じゃあ、ここからやってみようかなみたいな。なかなか動かないと思いますので、そこを、この専門講習にどうやって入れるのかというのは我々も今回まだ案としてまとめ切れていないのですが、今の御指摘も踏まえて、ガイダンスも含めてやっていただくということを講師と調整していきたいと思っています。

○桜井委員 最初のうちにこういうものが考えられるのだよと言っておいて、具体的になったら、それは無理だろうと。もう既にそういうものは調べ尽されているよとか。情報というのは持っていない人たちが情報を得ようとするわけですから、それだったらまずは、園田先生のところに行って一回相談してみろとか、そういうことをちゃんと教えてあげないと。

○園田委員 例えばどのようなものが言われるかということ、保全地域ではなくて、竹林が結構多いのです。みんなは里山といたら持続可能云々という能書きを言って、どう活用するかということをししゃべるわけです。だけれども、活用の具体例は何だということで、みんなそこでとまるのです。だから、例えば竹林の竹を炭焼きにしたり、かごをつくるというのは余りにも今の時代に合っていないだろうという話になって、ここで、今の時代における竹の活用は何だということをもうちよっと研究というか、いろいろ話し合う場が欲しいと。保全地域の中でも竹林をやっているところが何カ所かあるのです。その人たちはみんな、切

るのはいい、整備するのはいいけれども、こんなに山のように積まれて、腐って変なにおいがするので近所から文句を言われたとか、そういうのが多いわけです。それで、邪魔だからチップでやろうと思ったら、周りに宅地が攻め込んでいるから音がうるさいといってそれもできないという話は結構あるのです。私が出したアイデアの中では、今、竹パウダーというものは、あれは公社が買ったのか。

○内藤緑環境課長　そうです。

○園田委員　ああいうもので、東寺方のグリーン・キャンパスか何かで、あそこは恵泉という大学が来ていて、あそこは園芸があって、園芸とそれを結びつけるというと、これは有機堆肥だろうと。『現代農業』の4月号にそれが載っていて、みんなにコピーして読ませて、こういう手があるといって、そういう研究していくもののテーマの中に一つの課題を放り投げてあげて、それを対象にしている人たちがどうすればいいのかみたいなところを考えさせていくというのが、結構現実問題としては。

もう一つは、コナラ林を整備しているところ。コナラ林はちまちまと、それぞれのところでシイタケのホダ木に使ったりしているけれども、知り合いのところというか、東京にも椎茸組合があるのです。そこが今、一番困っているのは、3.11の原発事故以来、今まで取り寄せていた福島とか栃木、茨城の原木がないと。今、原木がないといって泣かれるわけです。園田さん、ブローカーをやらないかみたいなことを言われて、何でブローカーと。コナラ林を買って、私が手下に運ばせて、シイタケ農家に売るといって、そういう手配師をやれという話なのですけれども、そういうものも一つのテーマとしてはあるわけです。今、本当に困っているものがある。

こういう事例は結構あるのです。事例というか、活用しないと保全できないという、そのサイクルをつくるために今どこでとまっているかというところ、整備するところではみんな納得しているのです。いい環境を、いい里山をみたい。あとは、それが持続するためには何が必要かといったら活用だねと。そこのアイデアがないということです。

最近、グリーンシップで、企業の社会貢献活動であるエネルギー企業の人たちと仲よくなったものだから、バイオマス発電のものとものを、これを今までさんざん、化石燃料を燃やして地球環境に悪さをしたから、少し心を改めてみたいことを言っていましたけれども、そういう大型プラントではなくて、私が言っていたのは、大型プラントで云々といったらすごく大変だけれども、小さくやれるという手はあるよと。だから、そういうものを研究させればいいのです。つまり、軽トラを1台運んでいって4,000円ぐらいになれば、2人の晩酌代

になるというぐらいのイメージで、それ以上の対価を求めていないので、そういううまく仕組みづくりをやろうよと。自主研究の中にテーマを放り投げてあげると、それに寄ってくるやつは、現実にそれを痛感している人たちがいるのだから、いいのではなかろうかと思うのです。だから、そういうテーマを投げてあげるということです。

○小河原座長 時代に合わせたテーマというかね。

○園田委員 そうです。昔風のものでは。

○小河原座長 もう無理ですよ。

○小河原座長 もう専門講習の中身の話に少し入っていますけれども、具体的に先ほど桜井先生がおっしゃった自主研究のガイダンス、そういう時間をもしどこかでとろうとすると、資料7①で言うと、11月15日の自然環境行政の時間をそういうものに充てるというのもありかもしれないですね。

○内藤緑環境課長 要項で科目は定めていないですよ。

○事務局 科目は定まっています。

○内藤緑環境課長 確かにこれを見るとすごく座学も長くて、中途半端に1日とられてしまっているところがあるので、ここは、今、お話を聞いていて思ったのが、最初は科目ごとに調査をやろうかなと思ったのですが、そうではなくて、今まで受けた、身につけたものをもとに自分の活動フィールドで何か課題解決に資するような、もしくはまだうちのところは植生図もないから、これを機に植生図をみんなで作りたいみたいな、そういうことでもいいと思うのです。卒業研究ではないですけども、それを多目にとって、ほかの科目はもうちょっと圧縮するなり、ちょっと見直しを図る。どれを切るかというのはこの場ではなかなか難しい部分があるのですが、そこにたっぷり時間をとったほうがより充実した講習になるのではないかと。

単に受け身だけではなくて、先ほどの、現場の課題を放り投げたほうがということもあるので、確かに間伐材は今、すごく問題になっていて、実は、保全地域の団体さんに3月にアンケートをとったのです。1番がやはり人がいない、2番目が間伐材だったのです。人がいないというのは、これで地道にやっていますから、なかなか一足飛びにはいかないのですけれども、間伐材の問題はすごく根深いと思っているのが、先ほど園田先生がおっしゃったように、活動、整備でとまってしまっているのです。でも、昔使っていたものを積んでいてもしょうがないし、これを使わないと、何となく多摩は多摩、区部は別に関係ないみたいな話にもなっているので、それをうまく都市とつなぐような活用の仕方があるのではないかなと。

ただ、おっしゃるようにアイデアがまだないのです。ここは我々も今、宿題を持っているような状況なのです。むしろ講座を通じて何かヒントをいただければと思います。

○小河原座長 一番最後に「活動の評価とその手法」という私の時間があるのですがけれども、これはむしろ自主研究の発表と評価にしたらいいかもかもしれませんね。

○内藤緑環境課長 行政の話などはつまらないので、1時間ぐらいにして、うちのものを削って、なるべく自主的に活動できるように。場合によっては、ガイダンスのときに皆さんにお声をかけさせていただいて、よければいろいろ御相談に乗っていただけたらと。先ほど御相談タイム、コーナーみたいなものがあつたと思うので、そこも検討させていただければと思っております。

○岩間委員 21日も大分長いなという感じがいたします。いろいろな方をお招きしてお話を聞いたりするのもかもしれませんが、座学が長いとしんどいですよね。いろいろなワークショップの方たちを検討して、その中から選ばれてやられるのだと思いますが、いろいろな事例、いろいろな人を呼んできて見させてもいいかもしれません。あと、現場に連れていって、NPOに限らず、本当に地域でやっていらっしゃる方、個人でもいいし、小さいグループでもいいし、なるべく、そういうところの入り口を広げたほうがいいと思います。連れていって見させる、連れてきて話を聞くでもいいですけども、なるべくために。

先生方はワークショップで経験があるかもしれませんが、話し合いがもっと充実していれば、あの人の話を聞きたいと出ます。呼ばれたりするし、あの人の話を聞きたいから、お願いあの人に連絡をとってとやったときがチャンス。参加した人たちの声を引き上げてもらって、どうしてその人の話を聞きたいのと言うと、テレビでこんな話をしていたとか、実はこういう研修会に行つて、こんな話をしておもしろかったとか、そういうことも参考になるし、講師の方たちの参考にもなると思います。

○小河原座長 いろいろな講習の中で実習と書いてあつても、都庁でやるというのが結構多いみたいですがけれども、実際、ボランティア組織の運営ということであれば、そういう団体のところまで行ってね。

○岩間委員 はい、いいと思います。現場で。

○小河原座長 例えば九州の永池さんのところに行つて聞いてくるとか、そういうやり方があるのではないかというのが一つですね。それと、その講習の中でも、もう一人別の講師を呼んでくるとかそういうことですね。この方のお話を聞きたいとか、いろいろな組み合わせができるのではないかという御意見かなと思います。

これは中身とちょっと違うのですけれども、前も言ったかもしれませんが、資料8①の下のほうにあるのですけれども、先生方からも出ていますけれども、フィールドであったり、説明する対象に合わせてどうその場のミッションをちゃんと伝えるのか。もちろん対象に合わせた伝え方という技術もあるのですけれども、私は、基本的に日本の場合、この保全地域はこういうミッションを持った場なのだと。その中で皆さん一緒に楽しみましょうとか、一緒に学びましょう、一緒に活動しましょうというアピールが圧倒的に足りない気がするのです。アメリカなどですと、サンフランシスコの鳥獣保護地域などに行くと、ボランティアガイドさんが、まず先に何を言うかといったら、ここのミッションはと、そこから始まります。そのミッションのために私は一緒に活動しているという話ですね。日本の場合、そこが少ない。それは、逆に我々講師の側がそれを伝えてこなかったのではないかという、私は非常に深い反省がありますね。

○岩間委員 途上国でも今それをやっています。途上国ですら、私の場合はカンボジアとベトナムの支援の中でですけれども、それをやらせているし、やるとすごく責任感が出てくるし、自分がやっていることに誇りが生まれるのです。それで広がりがあります。現場に行くのが難しかったら、ポスター発表みたいなものやってもいいですよ。年に1回ぐらい集まってわいわいと。

○内藤緑環境課長 今日お配りしたものが八王子大谷と八王子滝山里山保全地域だけなのですが、前回はミッションのお話をいただいたので、実は、初心者向けの体験プログラムをやっているのです、それを今年から配ろうと思っているのです。これは大谷でもどちらでも構わないのですが、開いていただくと、ここの地域の目指すものみたいなところをイラストで示して、保全地域の役割であるとか、そのためにはこういう活動をして、こういうところを目指していきたいのだという取り組みを始めたところです。ただ、指導者講習になるともうちょっと詳しいもののほうがいいと思うので、そういう意味ではまだ資料がそろっていない部分もあるのですが、どうすべきなのか、どうしていったほうがいいのかというところは、やはりとても重要な視点なのかなと思っています。

○小河原座長 独自保全活動の企画運営も順応的管理をするのも、全てこのミッションを達成するためですよ。そこが、講師の側も伝え切れていなかったのではないかと思いますね。これは全体の話ですけれどもね。全体で60時間というすごい時間なのですけれどもね。

金子先生、何かございますか。

○金子委員 参加者の満足度を高めるためにどう努力するか。片方では、指導者としてどう

いう部分を養成しなければいけないかという部分もありますね。そこは、さっきの研究発表会も、きっかけは参加者の負担減と入っていますけれども、負担軽減も、参加者の満足度を高めるためにということ、それを少し整理するといいいのかなという気がしました。

○内藤緑環境課長 人材育成の講座なので、どういう人を育成したいのかということころは我々もしっかり持っていなければならないと思っています。1級ですと、ある意味、余り例はなくはないのですけれども、団体を立ち上げたり、グループをつくったり、その中で中心的な役割を担っていただきたいということころもあります。それが2級になると、そこまでいかなくとも、先ほどの話からすると、楽しさをどう伝えるのか。指導者というほどではないのだけれども、一緒に活動をしながらかう伝えられるのか。どうか共感をいただけるのかという、どちらかというサブリーダー的なといいますか、そういうイメージは持ってはいたのです。今後、まだ基礎講習もこれから講師と具体的な内容を詰めていくことになるので、そういったところを意識しながら事業をしていただくということは一つ重要なのかなと。

先ほど園田先生が受け口と追い口の話をしてくださったのですが、私は同じ光景を見ました。某グリーン・キャンパスで、大学生を呼んで、地元の団体さんがやるのですけれども、いきなり学生を周りに集めて、何も言わずに切り始めたのです。ちょっと待てと。何でこの木を切るのと。それはミッションともかかわってくると思うのですけれども、活動の意義とか、単に楽しいとか共感を得るのではなくて、そこにもっとさらに一層高めの共感というのですか、高いレベルの共感を得るということがひいては仲間づくりにつながったり、組織づくりにつながったりということもあるので、その辺の人材、人物像というものは今後、講師としっかり共有していきたいなと思っています。

○岩間委員 グリーン・キャンパスの明星大学の先生はうちの会員なのです。グリーン・キャンパスで連携して、どこかのお寺か神社か竹林があるところ。

○事務局 東寺方ですか。

○岩間委員 そうです。毎年、切り終わると、やはり間伐した竹をどうしたらいいかわからないから岩間さん使ってよと言われて、幾ら仲間でも使い切れないという話をしながら、仲間移動して、都内の学校で大分使っているのです。毎年、皆さんお変わりになってしまうので、多分そういう細かい話は引き継がれないと思うのですけれども、授業の中で実際にそれで花壇をつくったり、土のうをつくったり、流しそうめんをやるのに切って、みんなで持って帰ったりして、もう何年もやっています、結構いい感じになっています。

○内藤緑環境課長 明星ですよ。

○岩間委員 明星の先生がうちの仲間なのです。それで、グリーン・キャンパスの話なのですけれども、やる前に、先ほどなぜやるのという部分を、それを本来は当日ではなくて、大学というのは教育現場ですから、1回足を運んでもらって、なぜやるのという話のお時間をとったほうがいいのではないのかなと。皆さんがやらなくてもいいわけで、それをやる大学の先生の担当の方が勉強した上で授業の中でやってから行くとなったほうがいいのかなと。

○内藤緑環境課長 恐らくそれは教員がやっていると思うのです。当日ここ集合とって、いきなり竹を切るぞというのではなくて、恐らく授業の一環としてやっているの、事前学習というのは必ずやっていたらいいと思うのです。

○岩間委員 それプラス事後ですね。一つのサイクルとしてやったらいい。切った後どうなったのだろうと。自分たちの力が生かされたのかどうか。

○小河原座長 ほかに具体的な中身に関しても、御意見いかがでしょう。

○岩間委員 研修は何時間も、アンケートみたいなものは何回かとられているのですよね。

○事務局 はい。

○小河原座長 その結果、見直しも出てきていますね。

○桜井委員 アイデアレベルだから、話し合いだと思って聞いてください。講習をやるのだったら、毎回終わりに例えば30分、帰ってもいいし、残ってもいいみたいなので、自分でやる調整などの相談に乗りますよみたいな時間をとっておいて、毎回、小河原先生に来てもらうとか。誰か相談に乗ってやらないとね。事務局のほうで引き受けて、それを先生方に振って答えてあげるといいと思うのです。

○小河原座長 講師のスタッフだってね。

○桜井委員 それでもいいかもしれないですね。毎回そうやって意識づけをしていかないと、実際に、いろいろなところで私もこういうことをやったことがあるのですけれども、期間の間にやはり息切れしてしまうのですよね。最初はやるぞみたいになるのですけれども、だんだん尻つぼみになって、最後は、さっき先生がおっしゃったように、発表とかになると前の晩に徹夜で書いているのです。そういうようなことになってしまうのです。だから、はっぱをかけるというか、意識づけとか相談に乗って、行き詰まったときに応援してあげる仕組みをつくっておかないと。楽しくやらせないといけないから。応援できるような仕組みにしておかないといけないと思います。

○岩間委員 賛成です。

○小河原座長 それができる講座等はなかなか難しそうですけれども、多分、ケアできます

よね。

○桜井委員 講座に引き合わせて、そういう自分の興味関心をつくっておけば、その先生に問い合わせましようとか、問い合わせてくださいとか、逆にその先生とのパイプをつくっておいてもらうという方法もあるかもしれません。

○岩間委員 教員研修で環境教育の研修を3時間とか6時間とかたまにやります。例えば3時間やったとしても、終わって帰らないのです。1時間でも並んで待っているのです。そこをちゃんとやると、たくさん広がりますね。皆さん不安なのですよね。

○小河原座長 例えば共通の2月1日の事業管理が4時間、木内さんがなさるのだけれども、ボランティア組織の運営について、やり方は2つあるのでしょうかけれども、3時間を木内さんが実習をされた後、1時間をそういう時間に充てるとか、今おっしゃっているのはそういうことですね。夕方5時に終わって、さらに1時間というのはちょっとこれは大変かもしれないですけども、90分授業で考えると3時間を2こま。あと1こまはそれぞれQ&Aとか、自主研究の時間という、それはあり得ますよね。

○岩間委員 そうすると、参加者のためにもなるのですが、講師の人が直接参加者が何を知りたいかわかるので、次の内容にも役に立つかなと思います。

○小河原座長 講師にとっても勉強になりますね。例えば、そういうものもありですよ。専門の奥田先生の自然調査の進め方は4時間ですけども、これも現場でやって、自分のところではどうやればいいでしょうかなどと、そういうものを皆さん聞きたいと思いますよね。そう考えると4時間では少ないかも。6時間ぐらいとおいて、あと1時間、2時間は相談の時間に充てるというのもありかもしれないですね。フォローアップのお話もこの後出てくるので、それにももしかしたらかかわるのかもしれないですね。一度、フォローアップ講座の御説明をいただきましょうか。よろしく願いいたします。

○事務局 では、フォローアップ講座について御説明いたします。資料10をごらんください。講座修了生の多くから継続的な講習の希望がございまして、過去の育成委員会でも認定後のフォローアップの必要性がたびたび指摘されておりましたので、平成29年度から正式にフォローアップ講座を開催していきたいと思っております。講座骨子案としては、基礎講習と専門講習の間の9月、10月ごろに2回実施予定でございます。対象は、基礎講習・専門講習の過去の修了生を対象としまして、テーマを絞りまして、修了生から要望もありました応用的技術や知識、近年の話題の環境問題などについてより高度な知識を習得することを目的とした講座にしたいと考えています。こちらも例として幾つかテーマ案を列挙させていただきましたが、

特に必要なフォローアップ等につきまして御意見をいただければと思います。

最後に、認定指導者の活動相談対応としまして、講座修了生から活動場所の紹介を求める声があることや、保全地域の活動団体さんの中でも多くの団体が活動する上の悩みとして、新規会員の獲得と挙げていることなどから、講座の修了生に対して必要に応じて相談を受け付けまして、団体の立ち上げが可能な地域の紹介などのサポートを行っていきたいと思います。過去に認定指導者が関与しました保全地域での新しい団体の設立事例としては以下の2件がございます。

簡単ではございますが、フォローアップ講座の御説明は以上となります。

○内藤緑環境課長 ちょっと補足します。

これは新規で事業を立ち上げました。ここはお金を新規に取れましたというのをまずアピールしたいなど。やはり受けっ放しではなくて、先ほど岩間先生からお話があったとおり、受けた人はどうなっているのですかという、アンケートとかはたまにとってはあるのですけれども、やはり都内のどこかで活動していただきたいし、できれば保全地域でやりたいなと思っているわけなので、そういう人たちにもう一回声かけして、一応、フォローアップということなので、生物多様性とかと昨今言われておりますので、そういった知識とか、あと、ちょっとした技能を身につけていただくというところで、それをきっかけとして、もう一回、我々とのつながりを戻したいというのが本音のところですね。先ほどおっしゃっていただいたように、またちょっと活動したいんだよなというときに、今度、公社というところが体験プログラムをやるから一緒にスタッフで来ないかとか、そういうふうに使っていくというのは変ですが、うまくマッチングができればいいなと考えております。テーマはまた追い追いついてはいるのですけれども、過去、植物100種類の記録とか、これはすごいなと思っているのです。先ほどあったように発生材の活用法とか、意外にこの辺はまだまだアイデアがないし、むしろここでみんなでアイデアを出し合うのもおもしろいのかなということで、会場としては、保全地域か、もしくは今、高尾の森自然学校というのを八王子に開設しております、講義室もございますので、そこで午前中に座学をやって、午後はフィールドで活動とか、1日限りのコースではあるのですが、そういったことを検討していきたいと思っております。

補足は以上です。

○小河原座長 予算が取れたフォローアップというお話ですが、いかがでしょうか。

○内藤緑環境課長 額を言うのが恥ずかしいぐらいの金額です。

○園田委員 新しいことはいいことですので。

○園田委員 私が思うには、フォローアップ講習の中で、やったほうが良いというのは言っていましたよとか、それはともかくとして、やはりどうしてもやっている人たちの視野が狭くなるのです。つまり、自分のところのフィールドみたいな感じの、こういうふうになるから、できるだけ連携して行ってやるということの一つやっていったり、テーマ的に言えば、お互いがお互いを評価し合うという形の中で自分たちがやっていることを対象化するという作業をどこかで入れてやらないと、ここに書いてあるように、団体のアンケートで新規会員の獲得が悩みであると、うそ言えと私は言いますね。会員を本当に獲得しようというために何をやっているのだということになって、誰かが持ってくれば口をあけて待っていますよ。だけれども、そんなのないに決まっているじゃないか。自分で手足を動かして、頭を使えというところがないのはどうしてだろうなとすごく考えるのです。

それは、やはり自分たちがやっていることが対象化されていない。対象化されていないから、先ほどから言っているように、小河原さんが言っている中で、ミッションが全然鮮明でないということがそこから浮き彫りになってくる。

何のために新規会員をふやしたいのかというところをもっと突き詰めていくと、それは自分たちのミッションが曖昧だからだとか、そういうところに行き着くのだよね。ほら、おまえらこの程度のことしかやっていないじゃないかということをお互いに言い合って、ある種、切磋琢磨ではないですけども、そういう関係になるといいなと。

これは、今ある地域をばさっとやってもむちゃなので、例えばテーマごとに。テーマごとにというのは、さっき出た竹林なら竹林を持っているところとか、あるいは八王子の隣接しているところで、北多摩の云々という形で、これは、地域にしたほうがくるくる回れていいのではないかなと思っているのですけれどもね。

フォローアップの中で必要なのは、言葉で言えば、自分たちの活動を対象化するという作業が一番ではなかろうか。まとめるとそんなことです。

○小河原座長 おっしゃるとおり。私も、新規会員の獲得が悩みであって、本気で獲得しようとしているのですかと、いつもこれを言うのです。まさに自分たちの活動を客観的に見て、ミッションをもう一遍、再確認するためにも、相互評価ですよ。そうすると、今、「里山へGO！」は年24回されている。

○内藤緑環境課長 そうですね。体験プログラムは24回です。

○小河原座長 それは、結構いろいろな保全地域を回っていらっしゃるのですよね。その保全地域ごとの団体さんが受け入れというか、そういうことをしていらっしゃると思うのです

けれども、そういうところへ、新規会員を獲得したい団体は乗り込んで行って、その場でアピールすればいいではないですか。この団体はこういうことをやっているけれども、うちはこのことをやっています、ぜひうちにもおいでくださいというアピールをしに行くぐらいの熱心さ。それはお互いに相互評価になりますよね。それはその団体がやっているからといって任せておくのではなくて、そこがどういうことをやっているのか、見学も含めて、出かけていくということももちろんあっていいのではないかなという感じがしますけれどもね。そういうことをもっと呼びかけていただいてもいいのかなと。

○岩間委員 やっているというのをわかっていないかもしれない。

○内藤緑環境課長 この3月に保全地域の団体の方を集めて、交流会と称してワークショップをやったのです。ごちゃまぜにして、幾つかのテーマを、3つぐらい、間伐材の利用とか、人材の確保とか、テーマを3つ出して、どこかを選んでみんなで議論をしてくださいといったときにおもしろかったのが、人材が足りないというテーマをとったあるワークショップのグループは話が全然かみ合わないのです。うちは全然大丈夫だよというところと、全然入ってくれないのだよなど。大丈夫なところはどうやっているのですかと言ったら、いろいろやっているのですよねと。回覧板を使ったり、地域の町会でうまくやったり、一番は口コミとか人づてというところが多いのですけれども、一生懸命やっているところは何となく人を集められているし、うちはホームページも作れないのだよなどというところがなかなか情報を発信できなくて、団体の中での差がかなり大きいのかなというところは正直ありました。

○園田委員 比較的、これを見ていて、人材供給が安定しているというのは、地元の市などがやる講習があるではないですか。そこに講師として行っているのです。それは八王子市とか多摩市もそうなのだけれども、そうすると、講師だから、講師が自分のところにぞろぞろ連れてくるわけです。これで新陳代謝というか、新しい層が入ってくるような構造になっているのが一番わかりやすい事例だと思います。そういう意味では、地元の市などと連携していくことはかなり重要なポイントだということがその事例の中では言えると思うのですけれどもね。

○桜井委員 そういう話を聞いていると、NPOなどは、NPOの中間支援組織みたいなものがありますね。各地で中間支援組織がしっかりしているところは、要は金回りの心配までしていたり。

○園田委員 助成金の取り方までやるのだからね。

○桜井委員 認定NPOになって、金を集めて金を配ってやったり、足りないところに、手を挙

げてみる、50万円やるからといってやったり、広報はまとめてやってやるとかということがあるのを考えると、もしかすると、そういう中間NPOみたいなものを、「里山へGO！」をやっている講師にやらせてしまうとか、マッチングの話などは、行政が直接やると限界があると思うのです。だから、ずっとねちっこく面倒を見るのに中間の支援機能をきちんと持たせて、そこに面倒を見させるみたいなことも。逆に言うと、違うNPOみたいなものがあつたらそこにやらせるというのもいいかもしれない。そういうようなものを、きちんと階層的に置いたほうがいいのかもしいかなというのをちょっと感じます。

○園田委員 それは大賛成ですね。みんなが言うのは、どこに相談すればいいかわからないというのがよく言う話なのです。だから、これを直接、例えば環境公社や多摩環に何か言ってもそんなにすぐに動いてはくれないだろうというところで、細かなフォローをしてくれるところがあるといいなど。これはだから、どこでどう解決すればいいというようなことを、私に言われても、私は困るよと言うのだけれども、事例で言えば、横沢入で田んぼをやっている田んぼの会の会員が、みんな高齢化しているわけです。高齢化していて、みんな腰が痛いのだ、何が痛いのだとあって、とてもではないけれども農作業はきつからやれないと。誰にどう相談すればいいかわからないということをするのです。もう一つ、彼らが大変なのは、基本的にお米を売ってはいけないということがあるのでしょう。あそこは玄米ベースで800キロから1,000キロとれるわけです。こいつを配るのも苦労していると。そういうものだったら、幾らか売るような形にして、もう少しベースになる仕事については、それこそ何か手を考えたほうがうまくいくのではないかな。それでつないであげる。若い人たちが参加する場をつくってあげるというようなことがあるといいかなと。そういうアドバイスするところがないというのが結構大きいのです。だから、さっき桜井さんが言ったような感じの中間支援組織みたいなものをつくっておくと、そこに行けば、いろいろな細々とした相談に乗れるというのが一番いい仕組みではないかなと思うのですけれどもね。

○桜井委員 話を元へ戻すと、フォローアップ講座の中でも、テーマに絞り込んで高度にしてほしいというのは、「こうしたい」ですよ。ね。「こうしようや」と。いろいろなことを教えるために知識が欲しいというような。研究者ではないけれども、そういうこと。もう一個の相談対応してほしいというのは、これはまさに今、言ったような、コンサルしてほしいということだと思います。要は組織で欲しいのは2つあって、こっち側は知識を伝えてあげると、こっち側はそういうコンサル業というふうに、やはり上っていくと分かれていますね。だから、そこをきちんと見きわめて、こっちのためには相談対応よりも、きちんとし

た組織づくりをしてしまって、中間支援組織がやる。こっち側は1番のフォローアップ講座のように、徹底的に知識、技術をブラッシュアップして、その人たちを相談対応のほうでつくった組織がうまく使い回していくという仕組みをつくらないと回っていかないのではないかなと思いますね。

○園田委員 人を有効に使わなければという。

○桜井委員 育てたって、どこでそれを回していくのかといったときに、回していくというのは、一つは、ちょっときつい言い方ですけども、ひとりよがりな指導者を潰していく。見ていて、だめな人がいるわけですよ。だめな人に頼んできた人はなかなか文句を言えない。でも、それはきちんと中間支援の団体があって、そこが間に立ってあげると、そういうアンケートで、例えば私が幾つかのところへ指導に行くではないですか。そうすると、それを中間支援がアンケートをとって、幾つかの団体に行ったよねというのと、ある団体からというのと、どの団体からクレームが来ているかわからないから、結局、この人はやんわり言えるわけです。もっとこういうところに気をつけなければいけないよと言ってあげられるわけです。特にきわめていく人はどんどんこうなっていくから、そういうところをきちんとやって、だめなものはだめで潰していかなければいけない。お座敷にかからないやつはお座敷にかからないと、はっきりしているのではないかと。本当ですよ。それはやはりそういう評価をしていかないと、そのためにも中間支援があるほうがいいのかもしいかなですね。

○内藤緑環境課長 笑われてしまうかもしれないのですがけれども、公社になぜ委託したかという、まさに中間支援組織を、それまでは都庁の職員が全部受けているわけです。もつわけがないのです。なので、公社ということで、中間支援組織として機能しているかという、なかなかそこまでいっていないというのが現状です。我々は、実を言うと、保全地域は月1回も見に行けなかったのです。ようやく公社さんをお願いして、月に1回巡回して、希少種の状況とかをようやく把握できるようになったところがあるのです。そういう意味ではまだまだのところがあるのですがけれども、おっしゃるように、中間支援組織がないと、地元の団体さんへのきめ細やかな指導というのは多分、行政ではできない。ほかにどこか支援組織を持ってくるかという考え方もあったのですがけれども、それこそ安定した活動基盤をつくっていくためには公社をうまく活用したらどうかというのが、これが考え方なのです。ただ、スキルなり、機能なりがまだ追いついていない部分があるので、そこは我々も、人の育成も兼ねているので、さっきの話に戻ってしまうのですが。

○園田委員 公社を充実しろというのもなかなか。

○内藤緑環境課長 要は、そういうことなのです。

○桜井委員 私も幾つか中間支援の役員をやっていますけれども、いいところは金を集めている。小さいところで、力が足りないところには50万円を出すとか、補助金を出せるのです。企業を回って金を集めて、物も回している。ホームページでこっちの団体が引っ越しをするので机が3つ要らなくなりました。欲しい人はいませんかとやったり、そういうこともやっている。この前は、大きな航空会社が事務所をきれいにするから椅子を廃棄しますというから、国際線のあるところにもらいに行きました。

そういうことまでやれるようになれば、組織としては小さい地域の組織などは、ホームページをつくるのも間に立って、ホームページ業者を紹介して、ホームページをつくりたいところに補助金を出します、きちんとつくりなさいよ、どこに出すのですか、わかりません、こことここに見積もりを出させますからというところまでやってあげて、きちんとそのお金が生きるようにするというので、そのために結局、認定NPOをとったのです。金を回せるように。そういうようなところまで考えると、さっき言ったような、お年寄りでどうしようもないところも、足りないところ、要は届かないところというのはもう見えているのです。

私も長い間やっていて、企画力だとか、資金だとか、指導者がいないだとか、出てくるのは決まっていますね。それをケアしてあげればいい。言葉は悪いですけども、国際自然大学校などは今、いろいろな団体を食ってしまって、大きいのですよ。職員が百何十人いるのです。沖縄まで持っていますから。我々ぐらいの年代になると、みんな年をとって疲れてきてしまうのです。だから、統合して何をやるかといったら、経理処理を全部こっちで引き受けるのです。ちゃんとやっていくと、結局、お金回しで問題が出てきます。経理処理まで引き受けてあげる。そのかわり幾ら出しなさいよというので、これだけ出したら経理処理をしてあげますよと。そういう中間支援の機能を持ってあげると、今まで頑張ってきた人たちをより頑張らせてあげることができると思うのです。足りないところを埋めてあげる。

○岩間委員 公社の方が直接この話を聞きに、こちらにいらっしゃるということとはできないのですか。

○内藤緑環境課長 ここは公開の会議なので傍聴することはできますけれども、これは都の事業でやっていますので、我々のほうで事務局はやらせていただいています。

○桜井委員 きょうのを聞かせてあげたいということですね。

○岩間委員 そうです。直接ここで。

○園田委員 それは別途の。

○小河原座長 別途要請があれば、公社のスタッフが。

○岩間委員 多分、話しにくいこともあるのではないかなと思うのです。

○内藤緑環境課長 コミュニケーションはとっておりますので。確かに公社も、今、東京都のお仕事をいろいろやっただいていただいているのです。自然環境だけではなくて、廃棄物であるとか、今、再生可能エネルギーとか、いろいろやってもらっているというのがあるので、なかなかマンパワーが。もちろん公社もしっかり拡充はしているところなのですが、なかなか。中間支援組織があって、それぞれの団体のネットワークができてきているみたいな絵というのは。

○桜井委員 そういふのができそうな団体はないのですか。衣がえしてくれるような団体。

○園田委員 ない。

○小河原座長 中間支援組織にですか。

○園田委員 それはもう公社を充実させて、講習を受けた、もうちょっとできる人たちの、要するに公社のスタッフと一緒にさっき言った「里山へGO!」とか、ああいうものをともにやっていながら、ともに育てていくという実践の場がもっと要るのではなからうかと。

○桜井委員 公社の中にそういうチーム、セクションを置くということですね。

○園田委員 そうそう。

○岩間委員 一番自然ですよ。

○内藤緑環境課長 まさに人材育成もそうですけれども、リーダーであるとか、指導者も含めて、あと、組織のそれぞれの地域とのつながりも含めて、行き着くところは、いかに現場の、先ほどの人集めもありますし、間伐材の話もあつたのですけれども、いかに現場できめ細かな支援をしながら、みんなで協力し合いながら問題解決するか。一つの形をつくり上げるかというのがすごく重要だと思っています。その核となるのが、中間支援組織にいかに体力をつけさせるかというところが一番大きい課題なのかなと。ただ、来年度から予算を倍にするので何とかということもなかなか難しい部分があるので、我々のこういう指導者育成もそうですし、フォローアップもそうですし、今回の「里山へGO!」も含めてなのですから、いろいろと事業をしっかりと実績を上げながら、勉強しながらさらにレベルアップを図っていくという形をとっていきたいと思っています。

今回の指導者育成も、残念ながら3年に1回ということなので、今回のをしっかりと検証をして、3年後に向けて。多分、今年少し変えながらやっても、いろいろ課題が出てくると思うので、そこはしっかりと検証し、またこういった委員会の場で皆さんの御意見をいただきな

がら、事業のブラッシュアップを図っていければと思っております。

○小河原座長 金子先生のところでは学生さんのインターンシップをやっているということですが、そういう中で保全地域の現場とつながるということはもっとももっとできそうですか。なかなか大変ですか。

○金子委員 なかなか大変でしょうね。公社みたいなところではあるかもしれないですね。

○小河原座長 そういう手配をしてもらえれば。

○金子委員 はい。

○岩間委員 毎年うちはインターンシップを受けていて、ことしは筑波の学生を受けたのですが、うまく連携していたら、環境教育プラス保全現場で環境教育をという形でつなげられるのではないかと思います。受けてくれというのはたびたび来るので。

○内藤緑環境課長 インターンシップで保全活動に参加していただくというのは、今、事業としてのスキームはないのですが、ただ、先ほどグリーン・キャンパスの件もありましたが、若い人に入ってもらいたいというのがすごくあるのです。ミミズをいきなりさわるとは言わないのですが、この虫をさわるとか、チョウチョウをこうやってとって、チョウチョウの持ち方はこうとか、そういうものも。

あと、大学生に我々が注目しているというのは、彼らはその後、社会に出るわけですが、必ずしもすぐ山に入るかという、そうとは限らないのです。企業、会社に入ってやる。ただ、今、会社の中でもこういう持続可能、生物多様性も含めて、彼らは商売の中でそれを意識しながらやらないと、もはや企業は成り立っていかないと思うのです。そういう意味では、必ずしもすぐ鎌を振れとは言わないのですが、そういう頭を持って仕事をしていただく、社会に出ていただくことで、ちょっと体があいてきたらまた里山に来ないかという話にしたいのです。そういう若者に我々はとても注目しています。

○桜井委員 こういうことをやりたい若い者が圧倒的にふえていますよ。

○内藤緑環境課長 そうですか。それはすごく頼もしい。

○桜井委員 この前だって東大の大学院、何の専攻と言ったか、僕やりたいのですが、おまえ、東大まで行ってと。お父さん、お母さんは泣くぜと言ったのです。

○園田委員 私のところへください。使えないなとすぐ怒るから。

○桜井委員 でも、国際自然大学校を始めたころは、大学生はボランティアに来てくれなかったです。専門学校と言ったら、専門学校の人に怒られてしまうけれども、今は大学院の子なんて本当にごろごろいますよ。国際自然大学校は早稲田・慶応の大学院だって何人もい

ます。おまえら親が泣いているんじゃないと。

○小河原座長 時代が変わった。

○桜井委員 本当にそうだと思います。そういう時代ですから、上手に話をすれば。私は山梨に引っ越しましたでしょう。周りに若い子たちがうじゃうじゃいます。気がついたら、私の教え子が、桜井さん、お久しぶりです、近くに引っ越してきましたと。東京で、働いていたのが結婚して白州に来ましたと。そういう傾向はすごく強まっていますから、決していないのではないのです。届いていないのですよ。そういうものは諦めずに、「里山へGO！」でうまくいっているのだから、諦めずに続けていれば、必ず届くと思いますよ。パイは大きくなっていると感じています。

○内藤緑環境課長 そうですね。

○小河原座長 本当にそう思いますね。

○園田委員 そこらあたりで追いついていないのは、指導する側というか、そういう者の認識というか、頭が追いついていないと感ずることが多いのです。だから、それぞれの専門的な知識というのはあるけれども、社会の実情について知らない人がいっぱいいるというほうが正直なところで、さっき桜井さんが言っていたように、時代は変わっているのだよと。つまり、15年前だったら火をつけられる人が何人かいたけれども、今は誰もいないし、さっきの話ですが、ライターすら使えない。それから、あきれたのは、渋いという感覚がわからない。渋柿がわからない。だから、これが渋いという感覚だといって教えなければならない。さらに、社会的なことと言えば、格差社会というのはやはりすごくて、こんなにすごいのかと言ったのは、大学などで、授業とアルバイトで、みんなにちもさちもいかないぐらいの状態になっているとあって、あきれたのは、都立高校で私がサポートしているところで校長先生が言っていたのは、原則都立高校はアルバイト禁止です。でも、もしうちの学校でそのことを徹底したら3分の1は学校をやめますね。来ないですねと。要するにそういう社会状況を理解した上で若い人にも対応してやらないと、全くこいつらはどうせ何とかだというふうにすぐ年寄りどもは言うわけです。自分のときの時代の感覚でもって。もうそれは違うのだよということを事実として学んでいくということ。これは私も結構ショックでしたけれどもね。

○桜井委員 大学生で結構奨学金を借りている子は、卒業時点で600万円の借金をしよいますからね。普通の大学の卒業生が家を建てるために蓄える頭金ぐらいを蓄える間に借金を返さなければいけないのです。その子たちは、家を建てられるわけがないのだよね。だから、結

局、負のスパイラルになってしまうのですよね。その金を貸すあしなが育英会にいましたから、あまり言えないのですが。

○小河原座長 フォローアップで話題の環境問題の知識を知りたいというアンケート結果がありますけれども、おっしゃっているように、環境問題だけではないですよ。今の時代に合わせた知識ですね。

○桜井委員 ニーズを知らせてあげないといけない。

○内藤緑環境課長 それはすごく難しいのですけれども。

○小河原座長 逆に言うと、講師の側ももっと勉強しなければいけない。

○園田委員 そうなのですよ。講師の側が、講習というプログラムの中では無理なので、さっきも話があったように、終わった後にいろいろ相談しながらとか、そういうところで、結局、そこに行き着いてしまうというか、そういう社会的な問題に行き着いてしまうことが多いので、それは講師のほうがある程度の理解をしておかないと。

○内藤緑環境課長 誰かやってくれませんかね。

○岩間委員 とりあえず企業に就職はする、でも、常に環境系の仕事がないかということを探しているという学生は多いですよ。相談にいっぱい来ます。

○園田委員 こういう人たちは安く使われているからあまり言えない。みんな好きなことをやっているからとかと言うけれども。

○小河原座長 大分御意見をいただいたと思うのですけれども、ほかに全体としては言い残したこととか、この機会にということはありませんでしょうか。

○桜井委員 先生がさっきおっしゃった指導者という言葉は、やはり見直したほうがいいのではないかと。

○岩間委員 毎年出ていますものね。

○桜井委員 多分、難しいのです。非常に大きな課題、私も今、原稿を書いたり、本を書いたりしていて、その言葉をどうしようかと悩んでいるのですけれどもね。

○内藤緑環境課長 難しいですよ。インタープリターとか、いろいろあるではないですか。横文字は幾つかあるのですけれども、それは逆に万人にはわかりにくいし、メンターなのか何なのかよくわかりませんけれども。ただ、おっしゃっていただいているところの趣旨はわかりますし、我々も例えば基礎講習では、指導者というよりは、一緒に活動しながら気づきを与えられる、その人に楽しみをうまく伝える、解説できるという、どちらかというところという視点に立った、専門になると、指導もそうですし、ここのエリアをこうしたいのだ、

そのために、ミッションという話があったのですが、そういったところを意識した講習内容に、人材育成的にはそういった講習内容にしていきたい。また、調査研究を非常にたくさんお話しいただきましたが、その工夫点というものもありますし、先ほどの相談コーナーは、フォローアップでもそうなのですから、そういう時間は必要なのかなというところも改めて我々のほうにいただきましたので、そこは、特に専門講習とフォローアップについては、なかなか頻繁にこういう委員会も開催できない部分がありますので、そのところは小河原座長とも相談しながら、具体的なことを詰めさせていただければと思っております。

○金子委員 素直に緑のボランティア育成ぐらいのほうがいいですね。中で単なるフォローワーレベルの人もいれば、リーダー、星が3つぐらいついた指導者がいる。

○杉本課長代理 そうなのですね。これは、もともと条例のつくりの中で、もとになっている第9条が指導者の育成と認定という、そこなのですね。だから、その辺はもともとの柔軟に考えなければいけないという話かと思えます。

○桜井委員 それは条例上の、それはある意味、サブタイトルというか、それは行政上の建前であって、外向けには、今、先生がおっしゃったみたいに、緑のボランティア講座とか。

○桜井委員 星が3つぐらいだったら。

○岩間委員 逆に、そのほうがふえるかもしれない。

○桜井委員 ファイブスターとかね。

○杉本課長代理 講座の中身を見ている、こちら側の意見も共通しているのですね。なかなかハードルが高過ぎてというのが、きょう、いろいろ御意見を聞けて。

○桜井委員 星5つの人の会でファイブスターズとか。

○岩間委員 中学生がいっぱい来ちゃう。

○桜井委員 おもしろいかもしれない。わくわくしますね。

○岩間委員 いいと思います。

○園田委員 私は、「里山へGO！」で名札を配れよと。それで、来た回数だけ星を入れるとか。あなた5回なのというふうに公社に言っておいたけれども。

○小河原座長 それはいいアイデアですね。

○内藤緑環境課長 実際、アンケートをとると、10回ぐらいリピーターの方もいらっしゃるのです。結構、リピーター率は高いと思います。数字はすぐ出ないのですが、そこそこあるのです。1回だけの方は意外に少なく、そういう意味では、行ってみるとやはり楽

しいという意味では、少し掘り起こしにはいいかなと思います。いかにそこをもっと継続的に、学びたい人はもっと本格的な、継続的な活動をという、そういうルートをいかに我々のほうで示してあげられるのかというのがこれからの大きな課題かなと思います。

○桜井委員 そういうものは、ルートをつくるでしょう。来るのは10年後ですよ。要は、家族で来る。ファミリーで来たら子供が夢中になって、こういうものを一生懸命やりたいと。親は絶対やらないから。だって、仕事があるのだもの。安定した仕事があるからこそ参加できるわけだから、その人たちはそれ以上は無理。子供のために来ている。その子供だから、10年とか20年のタームで物を考えないとだめだと思います。

○内藤緑環境課長 我々もしっかり継続して。

○桜井委員 本当にそう思いますよ。

○岩間委員 おっしゃるとおりですね。教師などもそうですよね。その中で体験活動をした子供たちが教師になってやっていますからすごいです。無理かもしれませんが、例えばこの中で子供バージョンの日があってもいいのかなと。

○内藤緑環境課長 大体の体験プログラムでは、家族連れ、お子さんが多いのですけれどもね。子供が楽しめるように昆虫採集とか、竹トンボをつくろうみたいな、そういうものはやっているのですけれども、子供に特化しているかという、そういうものはないのですよね。

○岩間委員 子供はものすごくボランティアをしたがっていますよ。大人が想像しているところにまズないですよ。あの子たちの力というのは、小学生でも、中学生も、高校生もしたっています。それをうまく引っ張れる講師がいればつながると思います。本当にいますよ。

○小河原座長 ジュニアボランティアのプログラムをつくってあげたら、ほとんど、100%リピーターですよ。中学生になってもやりますよ。

○岩間委員 そうなのです。絶対来ます。大人の人たちも、子供をその日は預けられるからすごく楽なのです。2時間でも3時間でも。そして、いい子になって帰ってくる。明るくなって、ゲームばかりやっていたのに、意外といい子になって、元気になって帰ってきて。

○内藤緑環境課長 それを今、少しやろうとしているのが高尾の自然学校なのです。あそこも定期的にボランティアを集めてやっているのですけれども、彼らが次にやりたいのが子供のボランティアを使う。ただ、子供はどうしても安全の部分というのが、我々も行政の側としてすごく神経質になってしまうところがあるので、実際、しっかりした指導者がいるかという、高尾の森だと常駐の専門の方がいらっしゃるの、私、名前を忘れてしまったのですけれども、新しく入った方も結構有名な方なので、そういったところからまず始めていく

というのがすごくいいことなのかもしれません。そこは我々も、子供についても少し検討を進めていきたいと思っています。多分、ことしぐらいから少し始めるのではないかと思います。

○小河原座長 「里山へGO！」の体験プログラムもファミリー向けとか、特に子供を中心に今回はやりますよとか。子供を中心にやるから、この講習を受けた卒業生の人にぜひ手伝いに来てねというような話があるととっかかりやすいかもしれないですね。安全が絡むので、なかなか大変なのですけれども、中身としては、子供を相手にやるのは、初心者にはハードルがある意味低いと思います。

○桜井委員 小さい子をやるわけだね。小さい子を限られたエリアでやれば、初心者の人たちがね。

○小河原座長 やりやすいですね。いろいろなやり方があるので。

○岩間委員 遊びの中でもね。

○園田委員 大学生などは大喜びだから、そういう意味で引っ張れると思う。やはり高齢者が子供たちを相手にするというよりも、大学生が相手をしたほうが子供たちも喜ぶし、かつ、大学生もモチベーションが上がるのだよね。

○桜井委員 でも、幼稚園の子供あたりを連れてくるとおじいちゃん、おばあちゃんも役に立つ。

○小河原座長 ということでそろそろ。

○桜井委員 1つだけ。また募集のときには御連絡をしますので、ぜひ応募していただいて。今回、現業系が少なかったのです。1等賞をとった人は県知事に呼ばれて、知事を表敬訪問しました。だから、そういう道ができていますのでぜひ応募していただいて。応募していただければ表彰しますとは言えないのですけれども。100人近く応募があって、次回はもうちょっと多いただろうなと思っていますが。

○岩間委員 受賞者はこれでもっと忙しくなってしまうみたいです。

○桜井委員 彼はもう、結構いろいろなところで。

○岩間委員 来たら断れないところがあるからね。

○小河原座長 いろいろな制度がボランティアでもできてくるといいなと思いますね。

それでは、事務局にお返しいたします。

○内藤緑環境課長 きょうは長時間にわたり闊達な御意見、御議論をありがとうございました。我々も環境の人材育成というのは、都政の環境行政の中で非常に重要なテーマと位置づ

けておりますので、本日いただいた意見をしっかり、また座長とも相談しながら事業に活かしてまいりたいと思います。

本日は長時間にわたりまして、ありがとうございました。